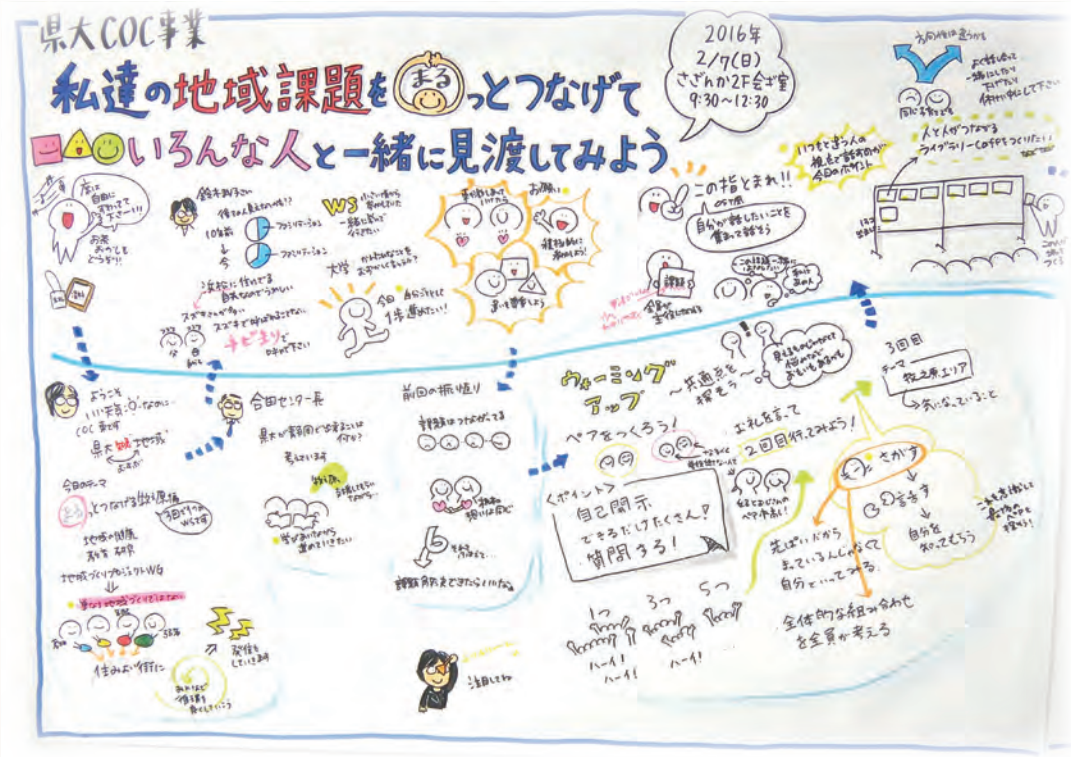
文部科学省 地(知)の拠点　静岡県立大学　cocora

「地域の課題解決をめざしたワークショップの手引き」

～つながりが地域課題を解きほぐす～



はじめに

「地域を良くしたい」。そこに住む人誰もがもつ願いです。
でも、地域にはいろんな課題があります。
立場によって、これが「問題だ」という課題も違います。

そうなると、「高齢者の介護が問題だ！」「交通の便が問題だ！」「仕事がないのが問題だ！」「病院がないのが問題だ！」と、
どの課題が一番問題なのかを、少ない資源で争うことになりかねません。

地域ではみんな仲良く暮らしたいのに、これでは困りますよね。
こんな争いを続けていたら、課題は解決されるどころか、悪化してしまうかもしれません。

そこで、私たちは、「地域を良くする」ための、特別な話し合いの仕方を考案しました。
単に、考えただけではありません。考えてみて、実際にやってみて、振り返ることで、考案したのです。

考案の舞台は２か所。ひとつは、静岡県静岡市。中山間地域から商業地域まで含む、人口70万の政令指定都市です。
もうひとつは、静岡県牧之原市。遠州灘に臨み、お茶の生産で知られる牧の原台地を擁する、人口4万6千の自治体です。

この対照的な二つの地域で考案されたのが、それぞれ、「未来マップワークショップ」と「つながりワークショップ」です。

これからの時代は、地域にあるさまざまな課題を対立させずに、関連させながら解いていくことが求められます。
このために私たちが考案した、二種類のワークショップをお役立ていただければ幸いです。

平成 28 年 3 月 24 日

静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター
地域づくりワーキンググループ

国際関係学部教授　津富　宏

目 次

地域の課題解決をめざしたワークショップ

（1）「未来マップ ワークショップ」……2
（2）「つながり ワークショップ」……5

未来マップワークショップ

1. ねらい

❶ ほんの少しでも地域のことに関心があれば、誰でも参加できるワークショップです

❷ 自分の暮らす地域にはどんな地域課題があるのかを皆で再確認し、これからどんなことができるのか、個人や地域・団体でできることを考え、共有することができます

❸ 地域課題を図に書き出すことで、地域課題が生まれた背景、地域課題と地域課題の繋がりを捉え、地域課題が作るマイナスの連鎖（悪循環）に気づくことができます

❹ 発想の転換で、地域課題を地域資源に変えて、そこから持続可能な好循環社会図を作り、これまでとは異なる新しい未来を共に考えるきっかけ作りができます

2. 対象

小学校高学年以上なら誰でも参加できます。

3. 開催までの流れ

- タイトル決定　例）未来マップ・ワークショップ「○○地域の課題を考えよう!」
- 会場の確保（島テーブルを作るので少し広めの部屋を確保しましょう）
- キーパーソンとなる人に参加を呼びかけ、そこから参加者を増やしていくと参加者を集めやすいです
  また、自治会や地域団体での開催もお勧めです
- 講話者を決めて依頼をします（キーパーソンに依頼するのも一案です）

4. 設定

- 参加者：12～20人（1グループ4人または5人×3～5グループ）での開催が基本です
- 参加者が決まったら、主催者でグループを割り振ります。この時、なるべく他分野、多職種、多世代でグループを構成しましょう
- グループごとに島のテーブルを作って着席してもらいます

5. 所要時間

180分（おおよその目安です　フリートークの部分で時間調整をしてください）

6. 準備するもの

- 模造紙（白、青、ピンク各1枚×グループ数）
- マジック（人数分）
- 付箋（適宜）
- プロジェクター等（必要であれば）

★ 付箋は、[グループワーク1]のみで使用し、[グループワーク2]、[グループワーク3]のマップ作りは、付箋を使わず、直接マジックで模造紙に書き込みます

7. ワークショップの流れ

導入1　開会　趣旨説明　5分

- 受付後、指定したテーブルに着席するよう誘導
- ワークショップ趣旨説明

  地域課題を解決するきっかけを作るために、まず自分たちの身近な地域課題を考えます
  地域課題はどうして生まれたのか、それを図に表して考えてみようと思います

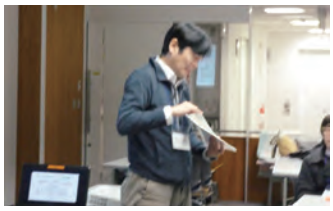
- 本日のゴールの説明

  地域課題がどうして生まれたのかを検討し、その地域課題を生かして、持続可能な未来社会の好循環な流れを考えてみましょう

アイスブレイク　グループ内自己紹介　10分

- 1人2分以内で順番に自己紹介をする
- ≪名前・所属・自分の暮らしている地域がどんなところか≫の3点は全員必ず話してもらう

導入2　話題（課題）の提供　15分



- 話題提供者の講話（3人まで　1人5分が目安）
  話題提供者もワークショップ参加者となる
  それぞれ違うテーブルについてもらう
  話題提供者はその回の地域課題のテーマについて何らかの意見や考えを持っている人、あるいは普段とは違う視点から地域課題を捉え、参加者に刺激や新しい気づきを与えてくれると思われる人を選ぶ
  あくまでも、導入としての軽い講話、と説明して依頼する
- 主催者側でタイトルを決め、簡潔に話してもらう　例）「自分にとっての地域課題」

グループワーク1　地域課題を考える（白の模造紙）

- 各自で地域課題を付箋に書き出す（最低5枚）　5分
- 付箋に書き出した地域課題をグループで共有しながら分類する
- 分類したものにそれぞれタイトルをつける
  例）高齢化、空き家の増加、雇用問題　等
- 分類したものを重要度順にランキング付けする
  （最低3位までの順位をつける）　15分

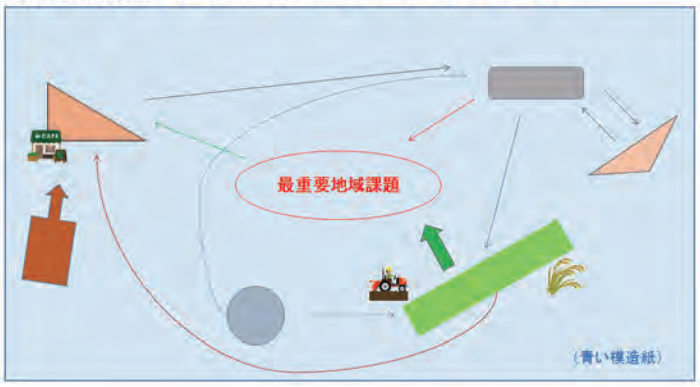
分類した地域課題にそれぞれタイトルを付けグループの中で、どれが最重要か（早急に解決すべきものか）順位付けをしてみましょう

全体ワーク1　地域課題の共有　5分

- ランキングを発表
  各グループの重要度第3位までをファシリテーターがホワイトボード等に板書する
  グループによる重要度に違いがあるかを確認

グループワーク2　課題マップ作り（ウェビング）　25分

地域課題の相関図（青い模造紙に直接マジックで書き込みましょう！）



- 課題マップ作り（模造紙へ直接記入します）

ランキングで1位の地域課題を模造紙の中心に書き、その周りを線で囲んでください
最重要の地域課題がなぜ生まれたのかを皆で考えてみましょう

全員マジックをもってください
さあ、その地域課題の原因として考えられることを、それぞれ書き込んでみましょう

さらに、そこから、つながりのある要因や事項を、外側に広げて自由に書き加えていきます
つながりのある項目同士は、矢印や線で結びます
くもの巣のように、中心からどんどん意見やキーワード、コメントを書き広げて行きましょう

- ファシリテーターによる各テーブルの巡回

全体ワーク2　課題マップの共有（青色の模造紙）　15分

- 他のテーブルを回って、他のグループの課題や考えを互いに観察・共有する
  他のすべてのテーブルを回るように時間を確認しながら参加者を誘導する
  グループ単位で動いてもらってもよい

他のグループの課題マップを見て、わからないこと、疑問に思うこと、同感することがあれば、それを、コメントや！？などの記号を使って、他のグループのマップに直接書き込みましょう

自分のテーブルに戻って、どんなコメントが書き加えられたか、グループで確認しましょう

ここで、休憩を入れます　休憩の間もお互いの課題マップを見比べてみてください

休憩　（適宜調整）　5分

場面転換　キーワードの投入　5分

発想の転換が未来を創る？！

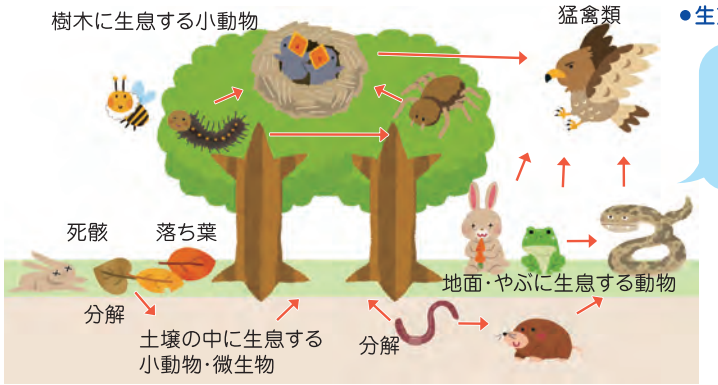
例えば・・・
空き家の増加⇔移住者の受入
⇔公共施設としての活用
耕作放棄地⇔農薬に汚染されていない土壌
⇔地域外就農希望者の受入れ
高齢化⇔文化・伝統の復活・継承による地域おこし
⇔昔ながらの生活の知恵の活用による共助
⇔健康寿命延伸のモデル地区化

※この部分はファシリテーターが説明する　マイナスからプラスへ、思考の転換を図る

- 発想の転換のヒント提供

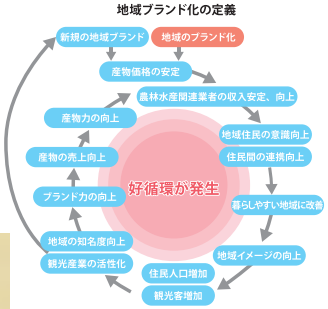
これまでのマップ作りで地域課題はそれ自体が要因になって、さらに次の地域課題を生む、というマイナスの連鎖を作っていることがわかります
発想の転換で、マイナスのつながりを断ち切り、その地域課題を地域の資源にしていくことはできないでしょうか

例えば、空き家は、公共施設としての活用や、他地域からの移住者の呼び込みに利用することができます
耕作放棄地は、農薬に汚染されていない農地であり、他地域からの就農希望者の受け入れに活用できるかもしれません
また、元気な高齢者がいるということは、その土地の文化・伝統を高齢者から受け継ぎ、それによるまちおこしが可能かもしれませんし、いざという時の共助の知恵の継承ができます　元気で生活する健康寿命が長いということで、モデル地区として行政と連携しているところもあります



●生態系図を示して、生態系的地域課題の循環図をイメージしてもらう

生態系では、良好な循環が生まれています
このような循環を地域社会でも作り出すことはできないでしょうか？

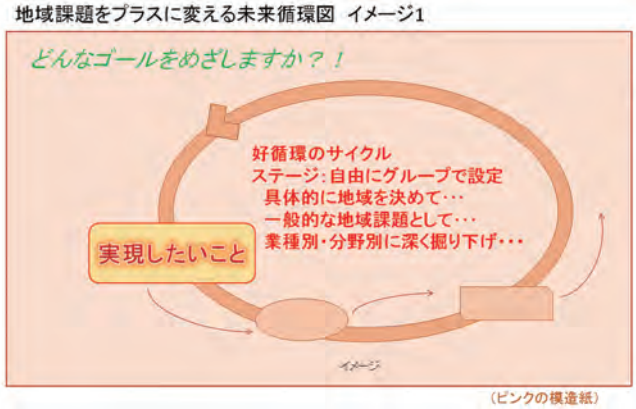


●地域社会循環図の例示
例）菜の花プロジェクト、地域ブランド化、環境省

これは菜の花栽培から始まる資源循環のサイクル図です　資源の好循環がイメージされています
地域をブランド化することでも、好循環が生まれると考えられます
また、環境省の資料のように、地域をマクロにとらえて、里山から大都市までの好循環サイクルを考えることもできます

参照図：特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク　http://www.nanohana.gr.jp/?page_id=2
農林水産知財専科　http://www.ondatechno.com/nourin/brand/index.html
環境省 平成24年版 図で見る環境・循環型社会・生物多様性白書　https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h24/html/hj12010305.html

グループワーク3　未来マップ作り　25 分



●好循環の未来マップの作成（模造紙へ直接記入）

グループで自分たちが実現したいことを1つ決めましょう　自分たちが実現したいことを決めたら、それをスタートにどんな連鎖が生まれ、どんな好循環な社会が作られていくのか、そしてどんなゴールが待っているのかを図で表してみましょう

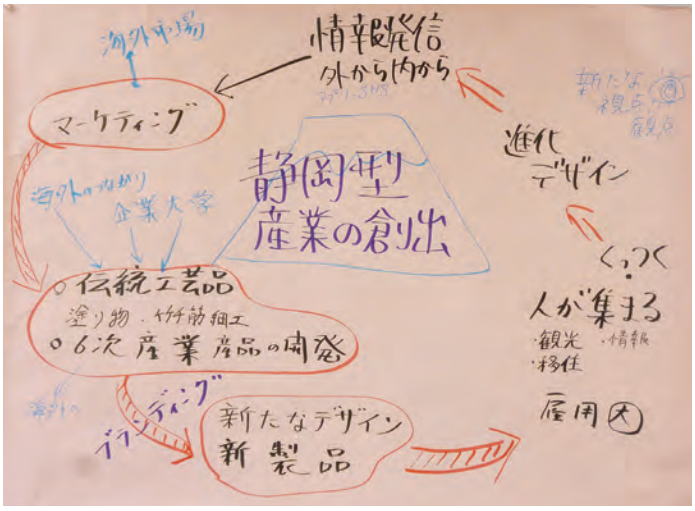
先ほどグループで作ったマイナスの地域課題循環図を見ながら、そのマイナスをプラスにするにはどうしたらいいのかを考えると、未来の好循環図が考えやすくなります

実現したいことは、ほんの小さなことでも大きな企画でも構いません
地域社会が生態系のように循環する、そんなサイクルを考えてみましょう

●ファシリテーターによる各テーブルの巡回

全体ワーク3　未来マップの共有（ピンクの模造紙）　15 分

●未来マップ発表　各グループ3～5分
自分たちが実現したいこととそれに伴う未来マップを発表し、参加者の考える持続可能な社会のイメージを全員で共有する



総括　5 分

●ファシリテーターによる総括・まとめ
地域課題の負の連鎖を認識できたか？
負の連鎖を断ち切ることはできるのか？
好循環図からどんな未来が見えてきたか？

フリートーク　30 分

●全員で感想や意見交換を行い、気づきを共有する
1人ずつ簡単に感想を述べてもらってもよい

ワークショップの様子

お問合せ　静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター　静岡みらい交流サテライト
地域連携コーディネーター　小山 弘子　koyama.coc@u-shizuoka-ken.ac.jp

つながりワークショップ

（正式名称：「地域の課題をまるっとつなげて、一緒に考えてみよう！　ワークショップ」）

1. ねらい

❶ここでは、地域のみなさんが主人公となり実施した「つながりワークショッ プ」の実例紹介を通じて、地域の課題を解決する糸口を得るためのやり方や考え方のヒントを提供したいと思います。

❷このワークショップのゴール設定は「つなげて（つながって）考えると地域課題解決への新たな切り口が見つかると実感し、自らアクションを起こそうと意欲 が高まっている。」です。
それが実際にどのように実施され、そこで何が起こったかをお伝えします。

❸このワークショップはそのまま実施すれば、地域課題そのものを即解決できるような魔法の術ではありません。この実例を元に、皆さんがそれぞれ地域の事情に合わせ、工夫したりアレンジしたりして活用して欲しいと思います。

❹ここでいう「つながり」は、課題の連関性でもあり、課題解決をめざす担い手のつながりでもあります。このふたつのつながりを通じて、その両面から問題を解きほぐしていく点が、このワークショップの肝になります。

2. 対象

高校生～大学生～一般市民（社会福祉協議会、商工会、ＪＡ、社会教育委員、NPO／NGO、市民団体、地域の自治会長、行政職員、教員など）

3. 開催までの流れ

- 参加者は、地域が成り立つために必要な分野の担い手、数人ずつに声掛けします。また、高校生や大学生など、地域の構成メンバーとしてこれから長く地域に関わる若い世代にも積極的にアプローチします。
- 男女比や年齢の幅も考慮し、参加者募集に際しては、地域づくりに関心のありそうな市民に、ワークショップの趣旨を書いた案内状を渡し、お誘いします。
- どのような参加者に参加して欲しいか、そこからワークショップの「場」作りは始まっているからです。

4. 設定

- 参加者: 20人～40人を想定します。
- 最初から、テーブルを「島」にして、座席を指定したりはしません。ワークショップが進むにつれて、参加者が座る位置を自分で決めるなど、会場の「場」作りも参加型で行うことにより、「場」の主体を、主催者から 参加者に徐々に移して行きます。それにより、ワークショップが終わった時、参加者が課題をめぐって自分が当事者であるという意識は高くなります。その結果、より具体的なアクションが出やすい状態を導きます。

5. 所要時間

全3回で1つのワークショップです。
（1回目180分、2回目180分、3回目180分、合計9時間。　＊時間を短縮することはできます。）

6. 準備するもの

- 30数人であれば、小学校の教室ぐらいの大きさの、広めの会議室。
- A4判の白い紙を4～5枚、A4判のクリップボードにはさんで、1人1セットを準備。
- 水性マジック（プロッキー）（1人1本）、模造紙、模造紙より大判のクラフト紙、セロテープ、のり、はさみ、付箋（75mm四方の付箋と、吹き出し形のポストイット）、アンケート用紙など適宜。
- （必要であれば）プロジェクター・パソコン・スクリーン等

7. ワークショップの流れ

1回目のワークショップ「思い出す・語る・つながる編」（180分）

オリエンテーション　15分

●初めは椅子を扇形に並べ（シアター型）、自由な席に座ります。
主催者挨拶、および全体（全3回）と1回目のワークショップの期待されるゴールとルールを、ファシリテーターが参加者に示します。

1回目のワークショップのゴール：
○○地域の課題を改めて確認し、つなげて考えるとなんかでてきそうだと感じている。

全体（3回）のワークショップのゴール：
　つなげて（つながって）考えると地域課題解決への新たな切り口がみつかると実感し、自ら具体的な行動を起こそうという意欲が高まっている。

ワークショップのルール：　＊お互いから　＊体験から　＊楽しんで　→　触発しあおう！　お互いの違いを尊重しよう！

ウオーミングアップ　「あとだしジャンケン」＆地域の特産品を使った「自己紹介」　25分

●オリエンテーションは椅子に座って受身でしたので、次は、椅子から立ち上がって部屋の後ろのスペースに全員で出てきて、ウオーミングアップを開始します。

＜あとだしジャンケン＞

「あとだしジャンケン」は、負けるように、後から手を出すジャンケンです。例えば、最初に相手がグーを出したら、一拍遅れて後から自分が負けるような手を考えて、チョキを出します。これをペアになって、徐々にスピードを上げながら、3回～4回行います。

●この活動は、高校生から60才以上の自治会長さんまで、多様な参加者がいる中で、緊張を和らげ、いつもとは違った視点を提供することを助けます。

ウオーミングアップが始まるよ！

＜特産品を使った自己紹介＞

「あとだしジャンケン」で場があたたまったら、次は「自己紹介」になります。
ファシリテーターは、ワークショップを行う地域の特産品を事前に調べておきます。
地域の特産品、例えば、「お茶」「ミカン」「レタス」「しらす」という特産品名を、A4判1枚の紙に1つずつ大きく書いて、ファシリテーターが、それらの紙を間隔を開けて床に置きます。
そして、参加者は、自分に似た特産品名が書かれた紙の周りに集まってグループを作り、

私は○○○です。なぜなら□□□だからです。

と、特産品にひっかけ、グループ内で、自己紹介をします。
例えば、「自分は、淡白な性格なので、シラスに似ています。」などといったように。

メイン・ワーク1　「相互インタビュー」と「他己紹介」　70分

（説明5分、インタビュー10分×2回、記事作り15分、6人又は8人で共有20分、感想共有10分）

- なるべく普段接したことのない2人が1組のペアになり、AさんがBさんにインタビューを行い、AさんがBさんを紹介する記事を書きます。次は、AとBの役割を交代して、BさんがAさんをインタビューし紹介する記事を書きます。各自が記事を清書する（＝記事づくりの）時間もとります。
- 次に、2人ペアが3組～4組合体して、6人～8人のグループになり、記事を読み上げながら、Aさんが、「私はBです。私は子どもの頃・・・・』などと言ってBさんを紹介し、次に、Aさんは、Bさんに「私は、Aです。私は子どもの頃・・・・・・」と言ってBさんに紹介されるという、「他己紹介」をします。
- 最後は、インタビュー記事を（お互い）本人にプレゼントし、ペアになったお礼とします。

相互インタビューの「問い」:
①子どもの頃は（この地域の）どんな環境で育って、どんな遊びに夢中になりましたか？
②そんなあなたが、自分はこの地域の人間だと、初めて自覚したのはいつ、どんな時ですか？
③この地域に住んで、良かったなぁと思ったこと。逆に良くなかったなぁと思うことを教えてください。
④あなたが残したい、大切にしたい、「この地域らしさ」ってなんですか？

- そして、次は、相互インタビューを行った感想を、別の2人組になって共有し、全体にも伝えます。「相互インタビュー」と「他己紹介」では、自分の気がつかない良い面を引き出したりスポットを当てたりしてもらえる機会となり、あたたかい気持ちになる参加者が多くみられます。
また、④のように、次のメイン・ワーク2で扱うテーマの伏線となるような「問い」も必要です。

「相互インタビュー」の結果を、6人になり「他己紹介」で共有しています。

（まとめの記録絵図）ウオーミングアップから「相互インタビュー」までの流れ

休憩　（適宜調整）　10分

メイン・ワーク2　「まるっとつなげて考える」を考えよう　40分

- 改めて地域の課題を確認します。

＜個人で作業＞
1. 地域の具体的な課題・問題を思いつくままに書き出します（A4判の紙に）。
2. その中でもっとも重要だと思う課題を一つか二つ選びます。

＜4人で共有＞
3. なぜ、それが重要だと思ったのかを、4人1組のグループになり、一人ひとり順番に説明します。
4. つなげて考えた方が、よさそうな課題をピックアップし、別の紙（A4判かA3判）に書き移し、それらの関係性を線で結びます。
5. （時間があれば）課題解決のためにつながるべき担い手を書き込みます。
6. 部屋の前のホワイトボードに紙を貼り出します。貼り出した紙をもとに、各グループが1分ずつ発表します。

- 貼り出した紙をもとに、7～8グループが1分ずつ発表します。

全体セッション　参加者がホワイトボードを取り囲む感じで　20分

- 班からで出てきた地域課題をめぐって、自由に発言を促します。

閉会挨拶

- 次回2回目のワークショップに期待することをアンケートで募ります。

(2)2回目のワークショップ「まるっとつなげてみよう　私の地域編」(180分)

オリエンテーション　35分

●オープニングの主催者挨拶。

2回目の期待されるゴール:
「第1回目の地域課題をチャンスととらえ、自分事として「つなげてまるっと」考えたな、と実感している」。

●1回目の「ふりかえり」を1回目の「まとめ記録絵図(グラフィック)」を参照しながら行い、参加者の思いを1回目のアンケートより抜粋して共有し、参加者が2回目の「場」に入るよう促します。

★1回目のワークショップのアンケート結果(抜粋):
・課題はどれもつながっていることを感じた
・世代は違うが、根本の思いや考えは同じだと感じた。
・とても楽しい時間と、人とのつながりを通して、地域を見つめなおす時間ができました。

ウオーミングアップ　「デートゲーム(共通点探し)」で自己紹介。　30分

●今まで話したことの無い人同士でペアになり、徐々に親しくなりながらテーマに接近します。

1回目　お互いの共通点(子どもの頃に骨折経験がある等、話さないとみつけられない共通点。)
2回目　お互いの共通点(「小学生の時、落とし穴作りに熱中してさ～、それで･･･」。などとエピソードとして話せる共通点。)
3回目　地域で気になっていることの共通点(バスの運行本数が減った。図書館がとても小さい。など。)

メイン・ワーク　「この指止まれ」　20分+40分

①前回の課題をまるっと眺め、個人で話し合いたいテーマ出しをし、A3判の紙などに書き、壁に貼る。つまり、やりたい人が自らテーマ出しをして「場」をつくっていくのです。
(参加者が30数人であれば、8～12テーマになると丁度よい。)

②(休憩中に)出されたテーマに賛同する人が、自分の名前を書いた付箋を、テーマの紙の下の方に貼りつけていく。この段階で、全体を眺めて、自然に2つのテーマが1つのテーマに合体してもよいでしょう。

③テーマを実現するためにはどうしたらよいか、②でできたチームで、好きな場所に机を出したり、輪になって床に紙を置いたりして、テーマを出した人を中心に話し合いましょう。

★話し合いで入れて欲しい<視点>:
「集める」・「受け止める」・「創る」・「巻き込む」・「伝える」

テーマ「それぞれがつながる場が欲しい」チームの皆さん

④話し合った内容を、模造紙に書くなど、「見える化」しましょう。

◆実際のワークショップで出てきたある地域の地域課題のテーマ

「この指止まれ！」で出てきたテーマ(例)	チームで話して発展的に出てきたキーワード
(1) 若い方が安心して出産・子育てでき、この地域で、楽しく働けるようにしたい。 人口を増やして、活性化。若い人・子どもの増加支援。	若い人が活躍できる場所づくり。 交通を便利に。大学設置。 地域や地区独自のものを。
(2) 子育てママとつながりたい。地域の、安心・安全な居場所づくり(「子ども食堂」) をやりたい！ (2つの「この指」が合体して(2) に)	「お互い様で自由に貸し借りできる」空き家、空き教室の活用。 農産物の融通も
(3) 教育・文化・生き生き活動の中心となる市立図書館を作りたい。 子どもから大人まで楽しめる場を作りたい。映画、演劇なども。	参加するのは高校生～シニアまで年齢に差は無い！ マンガ図書館もいいなぁ。
(4) 人と人が集まりつながる、ライブラリーcaféを作りたい！ 「知的に楽しい空間」	屋内(お年寄り～子どもまで) 屋外(冒険遊び場プレーパーク) NPO法人化も視野に入れて
(5) 地域に目だってきた空き家の楽しい利用方法について話そう！	必ずやろう！Wi-Fi、勉強、お菓子
(6) それぞれがつながる場が欲しい！！！ (小学校区や自治会の地区を越えて、もっと自由につながることのできる場が欲しい)	「人」から「場所」へ 場からお金をつくる。 有償ボランティア。
(7) 若者就労支援ボランティア・サポーター(静岡方式) 牧之原支部	こういうワークショップを開き、連絡をとり、会って話を聴く。若者とサポーターのマッチング。
(8) 現代版「茶の湯」：お茶を活用した、遊べるコミュニティを作り語り合う茶会がしたい。	「そっと寄り添ってもらうのがお茶であってほしい」
(9) 現在を Happyな時代だと考えることで、現状維持な思考を洗練させる。	新しい発想！　本当に忙しい？ 趣味のネットワーク、 消防団のコミュニティ　→　修繕が必要

ポスターセッション

- 各チームが書いたものを全員が見て歩きます。
- 見た後、全員が一重の輪になって椅子に座り、テーマを出した人が、「気づいたこと・発見したこと・やってみようと思ったこと」について話し、全体で共有しましょう。

水色の線の下、黄色く囲まれたのが出てきた地域課題のテーマ

ふりかえり

- 「まとめ記録絵図」の前に全員集合し、それを使って「ふりかえる」。

参加者のひとことコメント・閉会挨拶・記念撮影・アンケート記入

15 分

- 参加者の中で、一番若い人、一番遠方から来た人、目が合った人などから、コメントをもらいましょう。

2回目の記念撮影：1つの家族＝共同体のように仲良く写っています。

(3)3回目のワークショップ「全体まとめ編」(180分)

オリエンテーション

20 分

- オープニングの主催者挨拶。

最終回(3回目)のワークショップのゴール：
第2回のゴール(具体的な行動)をまるっとつなげてみて、すでに歩き始めているな、と実感する。

- 2回目の「ふりかえり」を、2回目の「まとめ記録絵図」を参照しながら行い、参加者の思いをアンケートより抜粋して共有し、参加者が3回目の「場」に入るのを促します。

チェックイン　「4分割シート」で自己紹介

15 分

- 1枚のA4判の紙を四分割して、
①お名前　②今の気分　③最近はまっていること　④今日、期待すること。を1人1枚書き、
4人～5人位のグループ内で、その紙を見せながら共有します。

グループワーク

25 分

- 2回目のワークショップで出てきた課題とその提案のテーマから、各自が1つ選んで、それぞれの「つながり」を考える作業をしましょう。

①前回の成果物(A3判の紙3枚～模造紙2分の1の大きさ～模造紙1枚の大きさなど、バラバラの大きさに書かれたもの)を、各グループが1枚の新しい模造紙の上に貼り込んで行きましょう。

②「誰と・誰が・誰のために・どのように」進めるか？ を話し合い、前回の成果物に貼り足し、書き足しをします。

誰とどのように課題の解決は進められるか？　高校生も一生懸命、書き足します。

休憩　但し、P9のグループワーク作業を続けていても良い　10 分

全体ワークの指示　5 分

- 複数の成果物（1つ1つは模造紙の大きさ）を、関連を見ながら、さらに、つなぎ合せた巨大なクラフト紙の上に並べ、並べたら「つながり」を書き込んでいきます。
- 靴を脱いで、紙の上にあがって作業をします。
- 最終的には、貼りあわせた巨大クラフト紙の上に、成果物を両面テープなどで貼り付けます。

全体ワーク　「まるっとアクション全体図」をつくる　30 分

複数のテーマ（＝各模造紙）が、関係づけられて矢印などで結ばれていきます。

①関連していたり、一緒に行動を起こしたりした方がいいものを近くに寄せて、全体を並べます。
（この段階で、ある2つは1つにまとめられるなど、複数のテーマが絞られ数が減ることもあります。）

②つながりの線や、つなげることで起きそうな行動（アクション）を書き込みます。

③完成した「まるっとアクション全体図」を見た感想を、各自が考えます。

④1人1枚、感想を吹き出し型のポストイットに書き、クラフト紙の上の貼りたいところに貼ります。

⑤クラフト紙の上に仕上がった、巨大な「まるっとアクション全体図」を、全員で見渡します。

⑥参加者3～4人からコメントをもらいましょう。

まとめの「ふりかえり」　「まとめの記録絵図」を見ながら　60 分

- 全3回の「ふりかえり」を、3回目のワークショップの最後にやりましょう。
  そこから、各自が「つながり」を見て、誰ともなく自然に、連絡先を交換し合い、いくつかの具体的な提案や行動計画が生まれると良いでしょう。

- また、「主催者に許可を求める必要などなく、出てきたアイデアは参加者同士でどんどん形にして行ってください。」、と主催者が参加者に伝えて終わりましょう。

閉会の挨拶・記念撮影・アンケート　15 分

- 今後の活動のサポートために、参加者は各自の連絡先をカードに記入し、主催者に提出する。

第3回「まとめ編」の記録絵（描き手：絹村亜佐子さん、井上美樹さん、村山直高さん）

巨大なクラフト紙に、相互に関係づけて貼られた複数の地域課題。
「地域が友達、地域が解決」というキャッチコピーが生まれたチームもありました。

実践協力	森　雅浩　（Be-Nature　School代表） 鈴木まり子（わくわくコミュニティ世話人、NPO日本ファシリテーション協会・フェロー）
参考文献	『ファシリテーション－実践から学ぶスキルとこころ』　中野民夫・森雅浩・鈴木まり子、他著（岩波書店、2009） 『協働知創造のレジリエンス－隙間をデザイン』　清水美香著（京都大学学術出版会、2015）
お問合せ	静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター　牧之原みらい交流サテライト 地域連携コーディネーター　東　宏乃　azuma.coc@u-shizuoka-ken.ac.jp　Tel.0548-23-0066

「地域の課題解決をめざしたワークショップの手引き」
～つながりが地域課題を解きほぐす～

発行：静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター
〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1
TEL：054-264-5441　FAX：054-264-5441
E-mail：shizuoka-coc@u-shizuoka-ken.ac.jp
発行日：2016 年 3 月 24 日

★このワークショップは、地域づくりワーキンググループの研究助成を受けて実践されました。
★この手引きがご入用の方は、「ふじのくに」みらい共育センターにお問合せください。